郡内研究

第6号

谷村座と若松館

内藤盈成

はじめに

厚生省の「衛生行政業務報告」による映画の数は、最も映画館の多かった昭和三十五年の四分の一に減少し、昨年末で千九百五十館となった、という。山梨県内をみても、現在、甲府に九館、あとは河口湖・身延・石和等で合計十三館、全国的にみて少ない方といわれる。

こんな新聞記事について目を留めたのも、かつてこの道で暮らしていた者にとって非常な感慨を覚える次第である。

そこで、このまちの娯楽の殿堂として、多くの人々をあつめて地域の文化的役割りを担っていた映画館について、そのあとを辿ってみたいと思う次第である。

谷村座の創業

谷村座の開業は明治十年、という古い歴史をもっている。東京京橋、新富町の新富座（松竹経営）の建物を模して建てたもので、当時としては、この建物が評判となって、その新装なった谷村座見物でまちが賑わいをみせたという。この新築落成記念の柿落し（こけらおとし）には、歌舞伎一座の河原崎権十郎一行を招いて盛大に開館披露を行ったと伝える。

明治二十三年九月十日付山梨日日新聞の記事に「女団州岩井粂八の一座は、今度南都留郡谷村座へ乗込み、八朔祭へ掛けて興行すると云ふ」とあり、当時は八朔祭りに、東漸寺の境内へサーカス一行が天幕を張って興行したり、見世物館がでたり、又力士を呼んで大相撲などの催しがあって、大変な人出で賑わった、という。

谷村座では明治四十一年三月に、東京健児館長の河合鴬我を招いて薩摩琵琶会を開いたり、素人義太夫大会、壮俳菊田兼一一行の「小柳富代」、「道中双六」「千代萩」や、又明治四十三年十二月には新派俳優の「日蓮記」が演じられ、舞台へは賽銭があがるという盛況で、この時石和で起った強盗事件を扱った「針金強盗刑事誉」という際物（きわもの）を演ずるなどして、大いに観客を動員した、という新聞の記事がある。

このほか開演時期は前後するが、評判が高く、大入満員で利益をあげたものに、小金井秀男一座、子供歌舞伎大橋座、川上かなる一座、剣劇、道中物、子供いじめ、裁判もの等、その時々に発生した事件を劇化したもの等があった。

大正期の興行

大正時代に入って、社会主義にかかわる思想問題講演会や佛教問題講演会が催された。県内では最も早いものとされていた大正九年十一月十九日、思想問題講演会が谷村座で開催された。弁士として堺枯川（利彦）を始め、山崎今朝弥、岩佐作太郎、加藤勘十、島中雄二という社会主義運動家達が熱弁をふるい、六百余名の聴衆をあつめたという。このような講演会は、県高等警察官や谷村署長の臨監があったことを新聞は伝えている。又壮士劇団の来演もあり、大火で焼失してしまったが、「民衆公論」と大書された引幕をはじめとして何枚かの由緒ある幕もあった。今遺っていれば文化財的にも価値のあるもので誠に残念である。

地元の劇団、歌舞伎一座として道志歌舞伎・大幡歌舞伎・猿橋の大原蝶之助一座もよく公演したという。

旧谷村座の構造

旧谷村座の建物（新富座を見本とした）の構造についてみると、木造二階建て、屋根の上に呼び込み用の樓がとりつけられていた。地下には廻り舞台、花道のせり上りも備え付けられ、勿論手動式であるが、一応舞台としての体裁は整備されていた。客席は桝（ます）で仕切られ、床板にはゴザが敷かれていた。この桝にお茶や菓子などが、注文に応じて売店の売子によって運ばれた。舞台裏の楽屋という役者の仕度部屋についてみると、舞台の半分は役者の持物、即ち部屋の置物である火鉢やたばこ盆、酒呑具、茶道具、戸口や障子等の大道具や小道具の部屋となる。これら道具類は、常に道具師という専門の人によって手入れがされて、いつでも使えるという準備が整えられている。谷村座の道具師は「稀代」という人で、毎日出勤して道具部屋の中で働いていた。特に東京の歌舞伎座一行を招く時は、大道具である背景、襖、障子の一つ一つに松竹より派遣された大道具絵師が直接手にかけたものでなければ演技をしてくれない、という

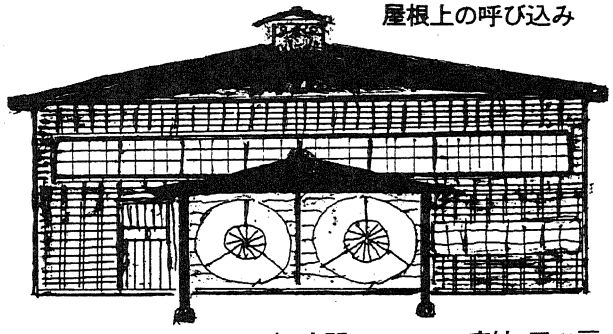
仕来りもあって、文字通り舞台裏の苦労は大変なものだった。

舞台の向かって右が太夫席で、ここで義太夫や三味線が、左側で鳴り物やはやし席とされていた。楽屋は裏二階にあって、部屋の正面には稲荷大明神が飾られ、小部屋に分かれて看板役者からその他多勢の大部屋と名札が張りだされ、入口にのれんを吊しての見るからに楽屋風景となっている。

木戸銭を払って入った所に下足番のおじさんが、谷村座と染め抜いた法被をまとって、番号を印した木札を一枚下足に、一枚を引き替え札として客に渡し、「いらっしゃーい」と威勢のいい声で迎え入れてくれるのである。

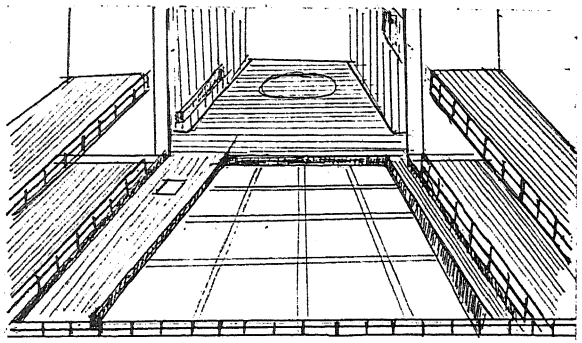
寒くなると、客の注文で「アンカ」という炭火をよくおこしたものを木枠で囲った箱を何銭かの料金で貸しだした。毛布を持ち込んだり、こっそりと炭火を持ち込んで暖をとる者もあった。

旧　谷　村　座



扉は両開き（引戸）

旧谷村座舞台　客席（マス）二階表面客席より



舞台幅６間
廻り舞台（手押）
せり上げ（花道）

（表面客席 左右客席）一階

（表面客席 左右客席）二階

舞台
左 お囃子部屋　　楽屋 舞台裏　二階　衣装部屋、化粧部屋、役者控室
右 浄瑠璃　　〃　一階　大道具（組屋形．バック背景）
（義太夫）席　　小道具部屋　所作舞台

若松館のこと

若松館の開業は大正十年、活動写真の常設館が県下で本格的に普及する頃である。若松館の前進は、若松亭という寄席を山口弥一氏が経営、後に田辺博氏が常設の活動写真館として開業したものである。昭和二年になって内藤興行が買収し、谷村映画劇場と名を改めて経営した。映画は、東宝・松竹・大映を主として上映した。

若松館と谷村座で活動写真の上映をめぐって競争し、大安売競争をした、という新聞報道がある。

大正十一年六月二十二日附の山梨日日新聞に「南都留郡谷村町には、活動定設館は第一若松館丈で、日活と結んで相当の入りがあり映画も五日毎に取かへて居たが、吉田に新設された寿館が、若松館の写真が替る毎に、二日間定期出張して谷村座で興行するので、激烈な競争が行はれている。若松館は写真を十五巻も見せて、ただの十銭、それに対抗して寿館は、入場料は二十銭であるがサイダーを一本呉れる、喜ぶのはお客様だ、梅雨期もいとはずつめかけて、二館共連夜の盛況で、館の方でも寿館は松竹から、若松館は日活から甲府以上の大物を取り寄せ、此所日活と松竹の競争映画の観がある。」と報じ

ている。

活動写真館の常設館がその興行を本格化するのは、大正の半ばからといわれている。

次に若松館で大正十一年に上映されていたフイルムを山梨日日新聞によってみると、「旧劇左甚五郎」六巻、新派「恋に泣く女」四巻、活劇「フェドラ」六巻を十銭で見せ、先着二百名に二十五銭以上の物品を進呈する（七月三日附）、新派悲劇「浜の舞台」五巻、旧劇「車丹波守」五巻、連続大活劇「戦闘の跡」四巻、漫画「凸坊探偵の巻」一巻（八月十二日附）、喜劇「外食連続無敵エルモ」、新派「罪の母」、旧劇「宮本武蔵」（八月十二附）、喜劇「チャップリンの富豪」一巻、新派「涙の日記」（十月二十八日附）他を上映している。

これに対して谷村座においては、西洋劇「孔雀夫人」五巻、旧劇「怪物退治武勇伝」六巻（十一月二十九日附）、「滑稽ロイド下を見ろ」一巻、連続活劇「グライド」十三巻、新派悲劇「目なし鳥」五巻、旧劇「平井権八」六巻（七月十三日附）を上映している。

若松館は昭和二十四年の谷村大火で焼失してしまった。この頃映画人口も増大し、その需要に応えるために仮説劇場、つまり露天の青空劇場として経営し、夏の夕涼みを兼ねての映画見物ということで好評を得たことを記憶している。

戦時中の興行

昭和十六年頃、「菊五郎劇団」の上演があった。東京歌舞伎座（松竹）からの公演は、県下において初めてのことでもあり、当時興行界の話題となった。来演記念として大事に保存していた「庵看板」（俳優の名前と家紋の入った庵形の看板）は大火で焼失してしまった。その時の主な俳優の顔ぶれは、尾上菊之助（梅幸）、沢村納芝、坂東彦三郎（七世市村羽左衛門の前名）で、芸題は源平合戦物の「梶原平三誉石切」で「梶原」に納芝が、又歌舞伎無踊「藤娘」は菊之助が演じた。舞台背景の製作は、総て歌舞伎座の裏方が担当、一週間位前から乗り込んできてこれに当った。

戦後の興行と谷村大火

戦争の痛手と人心未だ穏やかならぬ時代、昭和二十一年、中村吉右衛門の一座がやって来た。「傾域阿波鳴門」

（どんどろ大師）を中村時蔵と中村芝翫が演じた。義太夫は竹本鏡太夫であった。

翌昭和二十二年、沢村宗十郎、河原崎権十郎合同一座の公演で、芸題は、「与話情浮名横櫛（玄治店の場）他であった。

昭和二十三年には、市川猿之助一座を迎える。芸題は、先代猿之助の「黒塚」と「義経千本桜」であった。

このように一流の東京歌舞伎は、甲府公演に先だってこの谷村座で行われたのである。

この他、一般に人気の高かった浪曲公演があった。玉川勝太郎、浪花亭綾太郎、木村若衛、相模太郎、木村浦太郎等当代一流の浪曲師がやって来た。中でも寿々木米若の「佐渡情話」や天中軒雲右衛門の「瞼の母」は大入制限をする程の人気であった。

戦後逸早くこの地へ踏み込んだ東京歌舞伎、それは食糧難を克服するための手段でもあった。白米のご飯、新鮮な野菜に大きな魅力を感じて有名芸能人たちはこの山梨の田舎興行を受け入れざるを得なかったのである。この田舎に居ながらにして、千両役者の顔をこれ程身近に、しかも低料金で観ることができ得た喜びは、演ずる役者、観客共に幸福（しあわせ）と深い感動を覚えたことを明記しておきたい。

谷村座は、あの悪夢の大火、昭和二十四年五月十三日、灰燼に帰してしまった。

谷村座の復興

昭和二十三年、焼失した旧谷村座を大型化して新築する運びとなった。そのため、谷村座興行株式会社を設立、株主数十名の協力を得て発足した。戦後であり、物資不足の折であって環境庁の建設認可も思うにまかせず、大変な苦労を重ねた。故人となられた天野久衆議院議員と安田敏雄氏のご協力を得て、少し遅れたが許可の決裁をいただき、建設に着手することができた。請負業者は、河口湖町の生和産業株式会社に決定した。設計図書によると屋内に柱を使わないドーム式建築であることで驚いたものだった。用材は富士の唐松を主体とした。鉄骨材が現在のように使用できない時代であり、娯楽場建設などとんでもない、という社会であった。総てが闇物資としてあの手この手で調達しなければならない時代であり、中でもセメントの入手には四苦八苦した。

建築鳶職は、東京の大手会社から派遣された。現場に泊まり込みで作業を進めた。この鳶職の現場を見ようとして、町の職人衆が弁当持参で集まり、その手際よく進められる離れ技に拍手と歓声を飛ばしながら見入っていた。一本の継ぎ柱を中心に一組宛建てる、タンクに結ばれたロープの威力に驚きの目を見張りながら、数日にして立並んだ組立柱の高さに、唐松の集合体の化け物を見る、という感じで唯々感嘆の声を洩らすのみだった。

都会ででもなければめったに見ることのできないものと、近在からの多勢の見物人で工事現場周辺は混雑した。

客席は桝席から個々の椅子席になり、総席八百人、立見席と合わせて一千二百人収容可能な規模となった。

このようにして十間舞台をもった新谷村座ができあがった。新谷村座は映画を主体とし、時には立物（演劇・演芸）等、毎日公開常設劇場として開業した。

谷村座と若松館　（昭和33年頃）

新装なった谷村座の開館記念には、坂東好太郎と飯塚敏子の一座を呼んだ。だしものは「瞼の母」の公演で大変な賑わいを呈した。

戦後この谷村座で公演されたものに歌謡曲がある。美空ひばり・田端義夫・東海林太郎・他有名歌手、楽団として川田晴久や桜井潔といった著名なバンドの出演があった。新劇で小川虎之助一座、松竹歌劇団を招いて、谷村座と大月都留館で二日間にわたって興行し、大入満員の好評を博した思い出は忘れられない。

映画はシネスコ化してスクリーン（映画幕）も大型シネマスコープが上映される時代に至った。又総天然色映画が次々に上映され映画の魅力は益々向上し、観客動員も最高に達してきた。

谷村座の公共利用

戦後、自主的団体が多く生まれた。しかし会の運営で財政的な面で苦労していた。そしてこれら団体が目につけたのが、興行に対する前売券の販売だった。一枚捌いて何パーセントかの手数料稼ぎである。実績に応じた報酬が得られるので精出して奔走した。名映画、特別有名人の公演等、興行は水商売といわれるように雨・風・雪など自然の力にはどうする術もない。従って事前防止策として前売券販売が一番に優先される。料金の高い特別番組は極力前売の処置をとることが興行主の常識であった。

映画を主とした常設館として経営を続けたが、時として各種団体の定期総会、織物工業協同組合や商工会の表彰式、芸能大会、展示会などの利用もあった。都留市議会議員の芸能大会、市職の職員家族慰安会、又小・中学校児童生徒に教育映画・名画鑑賞の機会も提供してきた。今は女性センターや文化会館といった大きな集会の場所が設置されているが、旧市民会館が昭和四十三年に設置されるまで、この谷村座は広く公共的な場としてもその役割りは大きいものがあった。

地域文化の発信基地として地域文化の向上に果たした功績は大きいものと自負している。

谷村座の経営者

谷村座の経営については数代にまたがっているが、その当初は不明である。父内藤邦之助（昭和四〇年九月二

日八三歳没）は、その先代武井友三郎氏から引継いだ。この武井友三郎氏は現知事天野建氏の父元代議士・山梨県知事であった天野久氏に長く秘書として務めた武井治郎氏の父である。

おわりに

昭和三十五年頃カラーテレビの普及により映画館の利用は急激に減少、更にはレンタルビデオの普及で極端に映画館も減少した。そして今、映画の復興を目指した動きもではじめてはいるが、大勢はそう変わらないように思える。これからマルチメデアの発展が急速に進む傾向にある現状において、どのような方法で映画の再興をみせるのか、と映画館興行を職とした者として新しい時代に即応したものの実現に大きく期待を寄せるものである。

（都留市中央二―四―一二）